

クラスを超えた学び合い (3)
—日本人学生英語クラスと留学生日本語クラス間交流—
第3回活動事後アンケートの報告

坪田典子・野沢智子

Learning from Each Other Beyond the Classes (3)
—Interclass Communication Activities
Between Japanese and International Students at Bunkyo University—
Report on the Post Questionnaire in the Third Activity

Michiko TSUBOTA, Tomoko NOZAWA

Abstract

This study explores the benefits of interclass activities between Japanese and international students in terms of the linkage of intercultural communication and language education. This was the third time we conducted such an interclass activity between an English class for Japanese students and a Japanese class for international students. The activity was a one-shot face-to-face discussion in groups of three or four participants of mixed nationalities. The topics discussed were entertainment news, political issues, historical awareness, and so on.

Analyzing the result of the post-questionnaire, four factors were found: (1) Enjoyment to interact with foreign cultures; (2) Desire to be exposed to cross-cultural communication (Japanese > International **); (3) Eagerness to learn domestic and international affairs; (4) Motivation to acquire the communication language (Japanese < International *) (* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$).

Although some participants from both groups had shown disinterest or disgust towards each other, previous to the activity, the actual interaction stimulated and satisfied them. This is revealed in factor 1. The significant difference in factor 2 indicates that the Japanese students are usually less exposed to other cultures than the international students and therefore have a greater desire for such exposure. The scores of factor 3 are both high. And the significant difference in factor 4 means that the interaction with the Japanese students encouraged the desire of the international students to acquire better communicative competence in their second language. Even so, the Japanese students also got motivated to learn English, having been exposed to their counterparts' fluent use of Japanese, their second language, which suggests more influence on the Japanese students from this kind of activity.

I 問題の所在

筆者らは、留学生と日本人学生¹⁾とのクラス間交流をとり入れた活動を、ホームクラスの語学の授業の一環として、JSLとEFLのクラス間交流という形で過去3セメスターにわたって行ってきた。この交流活動は、留学生にとって、目標言語話者である日本人学生がビジターとしてクラス参加できれば、日本語学習の刺激になるし、また、国際学部にも所属している日本人学生にとって、留学生との交流という実体験が刺激となり異文化理解への道が開かれ、双方の目標言語学習が活性化されるのではないかという想いから出発した。

1990年に始まった文教大学国際学部では、「有為なる国際人の育成」を目標に掲げ、国際化に対応する外国語教育が行われてきた。英語運用能力重視と国際化へのITの役割の重要性という観点からCALLを英語必修科目として導入し、短期留学制度、派遣外国語教員制度、学生の海外ボランティアへの参加援助などが進められている²⁾。

また、異文化理解と国際交流を進めるため留学生の受け入れがなされている。2004年度の国際学部の留学生は、62名、情報学部とあわせて湘南キャンパスには全学生数の3.4%にあたる110名が在籍している。しかしながら、留学生の受け入れはあるものの、日本人学生と留学生の交流の実態については、あまり活発とはいえない。もちろん、留学生や国際・異文化交流に関心のある日本人学生など積極的な留学生、日本人学生の間では個別に交流が行われてはいるが、全体としては、留学生の存在さえ知らない日本人学生がいるのが実態である³⁾。

2004年度秋学期に行われた大学アンケートによると、「特に関心はない」とする無関心な学生が25.8%であり、「関心はあるが話す機会がない」とする消極的な学生が39.0%となっている。また、「友人がいる」とした積極的な学生は11.6%で、「少しでも話したことがある」学生は21.2%となっている⁴⁾。アンケート結果からも分かるように積極的な学生はごく一部で多くは消極的、または無関心な学生である。

これまでの留学生と日本人学生との交流を扱う研究・実践においては、消極的な学生や無関心な学生が大半であるにもかかわらず、留学生や日本人学生が総体として扱われるか、あるいはボランティアで応募するような積極的な日本人学生が対象とされており、多数派を占める積極的ではない学生の視点はとり入れられてこなかった。

関心が高く好意的・積極的な学生を中心に行われる交流だけでは、ホスト大学としての留学生に対する受け入れ土壌に変化を望むのは難しいであろう。消極的な学生や無関心な学生、抵抗のある学生を含む多数派学生をとり込んでこそ、国際人として育つ土壌がキャンパス全体に培われていくのではないだろうか。そうであるならば、「キャンパス内で意識的に国際教育の場を作り出すことは意味のあること」⁵⁾であるだろうし、無関心・消極派の学生に視点を当てた研究・実践が必要となってくる

1) 本稿では、留学生、日本人学生という二項対立的な表現を使用しているが、厳密に言えば、日本人学生という表現は適切とはいえない。一つには、日本人英語クラスは日本人学生にのみ開講されているわけではなく、現に第1回目の交流活動時にはマレーシア出身の留学生が履修していた。二つには、「日本人学生」と執筆者たちが総称する日本人は、留学生ではないホスト大学の学生という概念付けをしているが、実際には大学に在籍している在日の学生も含まれてしまうというアバウトな意味合いを持っている。しかしながら、ホスト大学の多数派を構成する日本人学生を問題にしたいため、便宜上、日本人学生という表現を使用することにしたい。

2) 『2004年度自己点検評価報告書』p.20 文教大学ホームページより

3) 湘南キャンパスはアジア系の留学生で占められているため、キャンパスに留学生がいることを知らない学生もいる。「4年生なのに留学生がいることを知らない学生がいた」(2004年春学期、留学生Wによる。)

4) [表5-5]を参照。

であろう。

本稿では、このような積極的でない多数派学生をとり込んだ視点をいれて、クラス間交流活動を分析し、語学教育と異文化コミュニケーションについて考察していきたいと考えている。本稿が依拠しているクラス間交流は、たまたまそのクラスに所属していた学生たちが主体となって行われる交流であるため、無関心な学生や気乗りのしない学生をもとり込まれることが前提となっている。

II 先行研究と本稿の位置づけ

留学生と日本人学生との交流に関しては、近年、研究・実践の蓄積が進み、外国人留学生のみならず、受け入れ側であるホスト国の日本人や日本人学生側に焦点を当てた研究も数を増し、日本人学生にも教育効果があるという報告もなされてきている⁶⁾。しかし、それら留学生と日本人学生との交流を扱った研究・報告では、留学生や国際交流・異文化交流に興味や関心を持っている日本人学生が対象とされてきた。それらの研究は、留学生と日本人学生による多文化混成のクラスでの授業実践に基づくものか、または、留学生とボランティアの日本人学生による交流に基づくものが多い。前者には〔梶原綾乃2003〕〔徳井厚子1997〕等があり、後者には〔金城尚美1998〕〔田中共子1996〕等がある。

そこでの対象となる日本人学生は、異文化コミュニケーションに関心を持っているか、留学生に対して関心を持っている積極的で好意的な学生である場合が多い。言い換えるならば、留学生との交流を扱う場合、その交流は、関心が高く好意的な日本人学生を射程に入れてなされてきたことになる。その上、分析に際しては、日本人学生一般、留学生一般として扱われることが多く、多数派である消極的な学生や無関心な学生、抵抗のある学生の視点がとり入れられることはなかった。

筆者らが行っているクラス間交流では関心のある学生だけを選別できないため、多数派の一般学生の参加を前提としてなされる。そのようなクラス間の交流に基づいたものとしては、JSLとEFLとの語学授業で討論とグループプロジェクトの試みを行った〔鈴木庸子/島崎美登里2002〕があるが、分析には多数派である消極的な学生をとり込むという視点はとり入れられていない。

また、英語教育に異文化コミュニケーションの視点をとり込んだ研究については多数見られるが、実体験の異文化コミュニケーションを扱う場合は、インターネットで電子メールや電子掲示板、e-learningのシステム、あるいはテレビ会議システムなどを利用しての国内外とのやりとりをする例が多い。本稿のように留学生日本語クラスと日本人学生英語クラスが実体験としてのコミュニケーションを日本語で行い、参加者の学習言語への動機づけや異文化コミュニケーション能力を考慮した観点からの研究は見られない。

本稿の特色は次の視点を組み入れている点にある。一つは、国際化の進む大学キャンパスでの交流がより広く行われるように、多数派で交流に関心のない日本人学生や、同じく交流に気乗りのしない留学生をもとり込んだ視点。二つは、語学授業に体験型国際教育を組み込む視点。三つは、外国語学習への動機づけを、目標言語の直接使用からだけでなく、異文化コミュニケーションの及ぼす効果から分析するという視点である。

III クラス間交流のこれまでの経緯

第1回と第2回の活動の概略は〔表3 これまでの経緯〕に記す。

[表3 これまでの経緯]

	第1回 2003年度秋学期	第2回 2004年度春学期
参加クラスと人数	日本語C 中国6 韓国1 台湾1 CALL102 日本21	日本語D 中国9 韓国4 台湾1 CALL204 日本7
時間	4回の授業にわたって、1.5コマ	3回の授業にわたって、2コマ
活動内容	10月31日から留学生が毎回2名づつ4回にわたって、日本人クラスを訪問して「日本に来て感じたこと」をテーマにスピーチをし、日本人学生と質疑応答し、評価とコメントを日本人学生から受けた。感想をホームページ上で交換した。	(1) 6月4日日本人クラスの“ <i>How could we make a more peaceful world?</i> ”というテーマのリサーチ中間発表(英語)に留学生が参加、質疑応答をした。 (2) 6月11日留学生のリサーチペーパーのテーマ発表に日本人学生が参加。 (3) 7月2日グループに分かれてリサーチ報告と自由討議
発表テーマ	「日本語について感じたこと」 「留学生生活について」 「日本人の宗教観」 「日本に来て感じたこと」 「日本人と中国人の食事のマナー」 「日本女性とタバコ」 「日本の食べ物」 「読書の天国」	日本人学生 “ <i>The Racial Discrimination</i> ” “ <i>Child Prostitution in Asia</i> ” “ <i>Education in Developing Countries</i> ” “ <i>The Nuclear Weapons</i> ” “ <i>Child Abuse</i> ” “ <i>Freedom of Expressions</i> ” “ <i>Ashura</i> ” 留学生：「在日外国人」「同情と平等」 「少数民族の権利」「イラク戦争－韓・日・米の関係について」「地球の水が危ない」「私の地球」「中国とは何」「アジア諸国と日本の歴史認識」「支那」からみる中国人の歴史認識」「日本人は無宗教か」「地球温暖化について」「水質汚濁の発生源と発生量」「日本人はなぜ無宗教か」「外食産業とビジネス」
問題点・課題	留学生が主体となった活動になり、日本人にとっては物足りない結果に終わった。スピーチという形態では、テーマが無難なものになりがちで、留学生が本当に主張したいことが言えるようになることが課題。	使用言語：英語で行った発表の内容が伝わりにくかった。 時間不足：発表後の質疑応答時間を充分にとれないことで、齟齬が残った。 活動記録の方法：内省にも使える話し合い記録をどういう形でとるか。
成果	留学生：日本人学生の前でスピーチを行ったことで自信をつけ、日本語学習動機が 日本人学生：「異文化理解」を身近に感じ、留学生の視点、日本語に刺激を受けて英語学習動機づけられた。 交流の場としての「教室」のもつ可能性の提示した。	交流の深化：テーマ性をもたせた議論を3回にわたって活動形態を変えて行い、その都度、留学生の鋭い指摘が日本人を刺激した。 ホームクラス活動への刺激：リサーチを進める上で双方の意見を取り入れた。 交流を希求する気持ちの高まり：「授業」という枠組みの中での交流を求めた。

IV クラス間交流の実際 —2004年度秋学期の場合—

本稿のもととなる04年度秋学期のクラス間交流のねらいは、留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間での交流を通して、双方の学生たちが目標言語運用能力と異文化コミュニケーション能力の育成をめざすことであり、それぞれの目標言語への動機づけが高められることを期待した。本活動は、筆者らのクラスでCross-Cultural Communicationと名づけ、本稿でも略してCCCと表記している。

IV-1 対象となるクラス

留学生日本語クラス 日本語C（1年次必修）24名

受講生は、国際学部と情報学部の留学生である。1年次対象の日本語クラスであり、2年生2人、3年生2人を加えて、日本語Cの学生は全部で24名である。大半の学生は、先行する04年度春学期に日本語Aを受講している⁷⁾。

日本語Cは、総合的な言語運用能力の育成を目指した必修科目である。大学での講義の理解能力に加えて、アウトプットを考慮したアカデミック・ジャパニーズの運用能力の向上を目指すことと、日本人クラスとの異文化コミュニケーションを通して生の日本語に触れ、自己の日本語運用能力を客観視し向上させることを目指した。

主な活動内容は、1新聞記事の要約、発表。2レジメの書き方、レポートの書き方練習。3リサーチ（資料講読、レジメを書いて発表、レポート提出）。4クラス間交流による生きた日本語実体験。これらの活動のうち、日本語の読解力と口頭発表能力の育成を目指して、新聞の要約を書き、記事の要点を発表する練習を2ヶ月近く毎回行ったが、その活動がそのまま事前準備活動となった。毎回記事を読むことで時事問題への関心も高まり、交流活動の際のテーマ提案や討論にも役立った。

日本人学生英語クラス CALL104（1年次必修）17名

受講生は、国際学部国際コミュニケーション学科の1年生17名である。インターネット接続されたCALL-Computer Assisted Language Learning = コンピュータ支援言語学習環境-の6226教室を利用して、速読プログラムでの学習の他、英語を使って自己表現をすることとインターネット上でのコミュニケーションを通じて異文化に触れることを目標とした。おもな活動内容は、1英文速読プログラムでの学習 2クラス掲示板でのクラス内コミュニケーション 3インターネットを利用した海外の大学とのコミュニケーションであった。

活動3では、ウクライナの大学とNicenetという授業運営ツールを利用して、ディスカッションを行った。話し合ったトピックは双方の国からのニュースと国際ニュース、互いの習慣や伝統行事などであり、これがそのままCCC事前準備活動となった。このディスカッションを行った時期にはウクライナが歴史的な瞬間を体験しており、ウクライナの参加学生は2004年11月から12月にかけての「オレンジ革命」とよばれる政治的に熱い時期の息吹を伝えてくれていた。ところが、残念なことにこの歴史的なイベントへの興味を積極的に示したのは、一部の学生であり、国際事情への興味・関心の薄さ、

5) [實平他2004:85]を参照。

6) [實平他2004:90]は、「日本人学生へのインパクトの方が、日本留学を通して既に様々なインパクトを受けている留学生と比較した場合、強い」としている。執筆者たちの事後アンケートでも同様の結果が出ている。

7) 04年度春学期の日本語Aでは、授業活動の一つに日本人学生へのインタビューとその報告活動を行っている。この活動が[表5-1事前アンケート1]の「交流がある」に影響を与えた可能性が考えられる。日本人学生へのインタビュー活動を取り入れたのは、前年度の執筆者たちのクラス間交流で留学生と日本人学生双方に交流がない実態が明らかになったためである。

ヴァーチャルな関係の構築の難しさがみられた。

Ⅳ－2 交流活動

04年度秋学期の交流活動は、それに先立つ03年度秋学期と04年度春学期の活動経過と成果から、事前計画では、学期を通じて、3回程度の活動を行う予定であった。しかし、諸条件から1回の授業時間すべてを使った1回限りの活動とした。その理由は、日本人学生、留学生のなかに交流をすることに乗り気でない学生がいたことである。留学生や日本人学生のなかには、交流は個人的に行っているので授業の中で行うことに興味を示さない学生がいたし、交流は行っていないがアジア系の学生との交流に乗り気でない日本人学生もいた。

そのため、実施までのクラス作りを配慮して、活動実施時期を延ばし、11月26日（金）に留学生と日本人学生双方が主体的に活動できるよう少人数グループでの対話活動を行った。討議テーマは、最近の時事問題や国際的な話題を中心に、各自、議論したい話題を事前に準備した。内容は以下の通りである。各国の文化社会および習慣に関連した話題（韓流ブーム、フリーター、少子化、核家族化、日本人の集団行動、食べ物、各国の英語教育等々）、政治経済的な問題（イラク戦争、自衛隊派遣、高句麗問題、日中関係、北朝鮮問題、尖閣諸島、中国経済）、歴史認識に関する話題（靖国神社参拝、韓国、中国との歴史的関係）、留学生、日本人学生に関する話題（日本留学の理由、アルバイト事情）などである。

活動に際して、双方の参加者は自己紹介と各自がグループ討議でとり上げたいテーマを用意した。日本語を使っただけの活動ということも手伝ってか留学生の方が慎重に準備をしており、日本人学生のなかには準備をしていない学生もおり、そのグループでは事前準備をしてきた留学生に不満がみられた。

グループ分けはその場で、くじびきを行い、両クラスの構成員である韓国人、中国人、日本人ができるだけ各グループに配分されるように編成した。当日の交流活動の記録は、グループメンバーの意見を各自がそれぞれまとめて記録した。その記録をもとに当日の感想を、留学生は日本語で、日本人は英語で（半数が留学生のために日本語でも）書いた。その感想は、担当教師のホームページ上で公開し、各クラスがアクセスして読んだ。この感想の公開にあたって、ある日本人学生は「私はすごく楽しかったが相手はどうだったのか知りたい」と留学生の反応を気にかけていた。活動を終えた直後、事前に消極的な態度を示していた日本人学生グループが教室に留まり、「こんなにおもしろいとは思わなかった」「もう1度話したい」「もっと時間をかけて話したかった」と筆者らに話しかけてきた。一方、消極的であった留学生も、想像していた交流と違ってたと交流への賛意を表明した。

Ⅴ クラス間交流の成果—事後アンケートから—

クラス間交流の成果を検証するために、事後アンケートを行った。本章では、そのアンケートの方法、分析および結果を提示する。

Ⅴ－1 調査の方法

CCC活動の成果を検証するアンケートは、活動での話し合い記録と活動自体に対する意見と感想から複数みられた回答を抽出し、それに筆者らが確認したい項目を含めて作成した。質問項目は、29問の共通項目と4問の日本人学生、留学生それぞれに対する項目を用意した。

各項目の回答は5ポイント評定で「5強く思う 4どちらかというと思う 3どちらとも

いけない 2どちらかというと思わない 1全くそう思わない」とした。このアンケートはそれぞれのクラスの秋学期最終授業時間内に各担当者が質問紙を配布し、その場で回収した。有効回答者数は、日本人学生14名、韓国人学生6名、および中国人学生13名であった。

V-2 分析手順

本調査の分析では、CCC活動に対する意見、感想にはなんらかの潜在因子が存在すると仮定し、主因子法による推定とバリマックス回転による因子軸の回転を行った。なお、欠損値はペアごとに削除した。今回の質問紙への回答は、5点評定で平均4.7を超えるものもあったが、サンプル数が少ないため、平均点が高い項目も分析の対象とした。留学生にとって曖昧であった項目、逆転項目、複数の因子から同等に負荷がかかる項目などを削除した上で、29項目のうち16項目を重ねて因子分析した。因子数は固定値1以上の基準を設けて因子数4を決定し、データを最もよく説明する因子の解釈を行った。その後、各因子得点においてまた各項目において日本人学生群と留学生群との間に有意な得点差が認められるかを調べた。

なお、すべての統計分析にはSPSSバージョン10.1を使用した。

V-3 分析結果

[表5-1 CCC活動に対する意見で抽出された因子]

番号	項目	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1 異文化に触れる楽しさ					
8	留学生（日本人学生）は国際的な話題に興味をもっている	.850	.284	.198	-.02
5	日常会話では話せない国際的な内容などが話せた	.845	.208	-.02	-.02
7	別の視点を学ぶことができる	.714	.272	.161	-.02
1	CCCは楽しかった	.703	.442	-.02	.149
	回転後の負荷量平方和 分散（累積）	23.727% (23.727%)			
因子2 異文化交流体験への渴望					
16	留学生（日本人学生）の勉学の姿勢に刺激された	.268	.760	.414	-.244
3	もっと時間をかけて話したかった	.408	.716	-.02	.128
13	交流したいが自分からはできないので授業の中であるとよい	.237	.714	-.02	.307
25	また機会があったら参加したい	.515	.647	-.02	.348
17	CCCを語学の授業ですることに賛成である	.530	.638	-.02	.307
26	CCCで留学生（日本人学生）に対する親しみを感じた	.589	.627	.318	-.02
29	CCCに参加してよかった	.486	.608	.338	.236
	回転後の負荷量平方和 分散（累積）	22.644% (46.371%)			
因子3 学び、知への渴望					
19	自分の国についてもっと学ばなくてはならない	.128	.128	.895	.331
18	国際的なことについてもっと学ばなくてはならない	.290	-.02	.765	.386
20	自分の国に対して誇りを持つべきである	-.02	-.02	.568	-.02
	回転後の負荷量平方和 分散（累積）	14.223% (60.593%)			
因子4 コミュニケーション言語習得への意欲					
24	英語（日本語）をもっと勉強しようと思った	-.02	-.02	-.02	.793
21	英語でも話し合いたい	.233	.182	.316	.557
	回転後の負荷量平方和 分散（累積）	9.726% (70.320%)			

V-3-1 各因子の解釈

因子1は、4項目に負荷を与えており、日常会話では話せない国際的な話題について話したこと、別の視点について学べたこと、CCC活動が楽しかったことを示している。これらをまとめて、因子1を「異文化に触れる楽しさ」とした。

因子2は、7つの項目に負荷をかけている。これらの項目に共通するのは、授業内で行われた交流体験に対する肯定的な感情である。中でも交流相手からの影響を受けたので、もっと時間をかけて交流したかった、次の機会を期待しているなどは、日本人学生、留学生とも高評点であった。これらから因子2を「異文化交流への渴望」と解釈した。

因子3は、3項目に負荷を与えている。参加者たちは、CCC活動での交流の結果、自国のことについて説明する力のなさや国際的な事情についての知識のなさを実感した。これらから因子3を「自分の国、国際的な事象を知ること」と解釈した。

因子4は2つの項目に負荷をかけており、留学生と日本人学生ともに目標言語学習への動機づけを得た一方、日本人学生と留学生の共通言語（国際語）である英語でも話し合いたいとの意見が出たことから「コミュニケーション言語習得への意欲」と解釈した。

V-3-2 各因子の考察

以下に各因子の結果と考察を提示する。各因子項目表は、日本人学生と留学生の各評点の平均と2群の評点の有意差を示す（** $p<0.01$ * $p<0.05$ ）。なお、因子得点を日本人学生と留学生とで比較したところ、因子2「異文化交流への渴望」が、1%水準で日本人学生の因子得点が高く、因子4「コミュニケーション言語習得への意欲」は、留学生の方が5%水準で因子得点が高かった。

因子1

[表5-2-1] 「異文化に触れる楽しさ」

因子1 「異文化に触れる楽しさ」項目	日	留	有意差
8 留学生（日本人学生）は国際的な話題に興味をもっている	4.43	3.11	**
5 日常会話では話せない国際的な内容などが話せた	4.08	3.74	
1 CCCは楽しかった	4.43	4.16	
7 別の視点を学ぶことができる	4.29	3.79	

因子1の各項目では、評点はいずれも日本人学生が高く、とりわけ、「8（相手が）国際的な話題に興味をもっている」は1%水準で日本人学生が高くなっている。今回の交流活動の話題を概観でしてみると、国際的な話題は、イラク戦争や自衛隊派遣などイラク戦争に関するもの以外は、留学生の国と日本との関係についてである⁸⁾。ホスト国日本との関係に無関心でいることができない留学生にとって、日本との関係は主要な話題となるが、それを国際的として認識することは少ない。一方、ホスト学生である日本人にとっては、留学生の提示する話題自体が国際的である。全員が国際学部国際コミュニケー

8) IV-2を参照。

シオン学科在学の日本人学生にとって、留学生との異文化交流で、国際的な話題と異文化の視点は重要なキーワードとなっており、日常会話では得られない刺激がCCCの楽しさと結びついている。

因子2

[表5-2-2] 「異文化交流への渴望」 因子得点 日>留**

因子2 「異文化交流への渴望」項目	日	留	有意差
16 留学生（日本人学生）の勉学の姿勢に刺激された	4.50	2.68	**
3 もっと時間をかけて話したかった	4.71	4.05	*
13 交流したいが自分からはできないので授業の中であるとよい	4.08	3.58	
25 また機会があったら参加したい	4.71	4.00	
17 CCCを語学の授業ですることに賛成である	4.43	3.74	
26 CCCで留学生（日本人学生）に対する親しみを感じた	4.86	3.47	**
29 CCCに参加してよかった	4.79	3.79	**

因子2の因子得点は日本人学生の方が留学生より1%水準で有意に高かった。項目別では、「16（相手の）勉学の姿勢に刺激された」と「26 CCCで（相手に）対する親しみを感じた」、「29 CCCに参加してよかった」に1%水準での有意差が認められた。秋学期の初めに行った留学生／日本人学生のイメージを問う事前調査では、留学生、日本人学生の双方が、相手グループを「グループ同士で固まっている」というイメージで見ている事実があった。しかし、交流後は、「（相手に）対する親しみを感じた」日本人学生の得点が4.86と日本人学生の総評点の中で最高点を記録した。日本人学生にとって、交流が強いインパクトをもって受けとめられており、留学生への親しみを増すきっかけとなっている。日本人学生の評点が高いのは、交流経験のない学生が大半を占めていることと関係している[表5-3事前アンケート1]。一方、留学生の側の評点が低いのは、日本人のように即、親しみと結びつかない事実を示唆しているが、「3 もっと時間をかけて話したかった」や「25 また機会があったら参加したい」における得点に見られるように交流への興味関心は決して低くない。

日本人学生に異文化交流経験がないという実態は、本交流活動の事前アンケート [表5-3]、[表5-4]と大学アンケート[表5-5]に示されている。事前アンケートは5段階評定で、「5強くそう思う 4どちらかというと思う 3どちらともいえない 2どちらかというと思わない 1全くそう思わない」の各人数を、日本人学生、留学生別に記したものである。[表5-3]からは、日本人学生の交流経験が極端に少ないという実態が窺える。また、[表5-4]からは、留学生日本人学生とも大半が交流を望んでいるという結果が出ている。[表5-5]の大学アンケートでも、交流経験がない学生は全学生の7割弱となっており、筆者らの事前アンケートの結果と符合する。

[表5-3 事前アンケート1] 「日頃、留学生（日本人学生）と交流がありますか？」

	5	4	3	2	1	計
日本人学生	2	1	0	3	10	16
留学生	8	2	1	4	1	16

[表5-4 事前アンケート2] 「留学生（日本人学生）と交流したいですか？」

	5	4	3	2	1	不明	計
日本人学生	5	8	3	0	0	0	16
留学生	5	3	6	1	0	1	16

[表5-5大学アンケート]

問40あなたは本学の留学生とどのように関わっていますか（あなたが留学生の場合は、本学の日本人学生とどのように関わっているかを答えてください）（有効回答数3730）

友人がいる	11.6%
少しだけ話したことがある	21.2%
関心はあるが話す機会がない	39.0%
特に関心はない	25.8%
無回答	2.0%

(2004年度自己点検評価報告書pp.450-451)

因子 3

[表5-2-3] 「自分の国、国際的な事象を知ること」

因子 3 「自分の国、国際的な事象を知ること」項目	日	留
19 自分の国についてもっと学ばなくてはならない	4.71	4.26
18 国際的なことについてもっと学ばなくてはならない	4.71	4.05
20 自分の国に対して誇りを持つべきである	4.00	4.36

因子3の項目は、有意差はみられないが、日本人学生、留学生ともに、他の因子に比べて高い評点をつけた。日本人の評定は、「19自分の国についてもっと学ばなくてはならない」、「18国際的なことについてもっと学ばなくてはならない」の項目で4.71と高く出ている。日本人学生も留学生も、対話という相互行為をすることにより、両者とも自国について知らない自己を相対化して認識し、自国についてもっと学ぶ必要があるとしている。また、両者とも国際的な事象について学ぶ必要があるとしている。「20自分の国に対して誇りを持つべきである」は、相手に対して思っている可能性もあり、設問があいまいであったきらいがある。

因子 4

[表5-2-4] 「コミュニケーション言語習得への意欲」 因子得点 日<留*

因子 4 「コミュニケーション言語習得への意欲」項目	日	留
24 英語（日本語）をもっと勉強しようと思った	4.29	4.63
21 英語でも話し合いたい	4.29	3.94

因子4では、留学生の方が5%水準で有意に高い因子得点を出している。「24英語（日本語）をもっと勉強しようと思った」は、留学生の総評点で最も高い平均4.63と出しており、唯一留学生の方が高い値の項目である。使用言語が留学生の目標言語である日本語で行われたので、留学生の方により強く目標言語学習への動機づけを促す結果として現れたのであろう。日本語の教室を出て母語話者と相互作用することが留学生の刺激となり、言語学習への動機づけとなることを表している。一方、日本人学生にとっては、交流活動が日本語で行われたにもかかわらず、留学生との交流の実体験が刺激となり、目標言語である英語への動機づけにつながっている。

「21英語でも話し合いたい」については中国人学生4.33、日本人学生4.29、韓国人学生3.17と中国

人学生が日本人をも上回る評点を出している。日本語を目標言語としている留学生（中国人）に国際語としての英語の重要性が認識されているのは興味深い。

V-3-3 日本人学生項目と留学生項目

以下には因子分析の対象とはならない日本人学生項目と留学生項目の結果を示す。

日本人学生項目

[表5-6 日本人学生に対する質問項目]

30j 留学生は意見をはっきりと表明するので見習いたい	4.43
31j 留学生の日本語は自分の英語よりよかった	4.79
32j 留学生の日本語の勉強方法を知りたい	4.14
33j C C Cで留学に対する心構えができた	3.79

目標言語学習への動機づけは双方とも高い値であったが留学生の方により高評点がでた。他方、日本人学生は、「31j留学生の日本語は自分の英語よりよかった」、「32j留学生の日本語の勉強方法を知りたい」の評点に見られるように、留学生の日本語から逆照射する形で目標言語学習に関心が示されている。留学生の「上手な」日本語使用に影響されて、目標言語である英語学習への動機づけが高められたといえよう。

これらの項目に対して高い評点を与えた日本人学生は、留学生との交流を通して、相手の日本語力と自らの英語の実用レベルを比較して、刺激を受け、外国語学習方法への興味を喚起された。このことが、因子4の英語への学習意欲と関連している。「30j留学生は意見をはっきりと表明するので見習いたい」では、4.43の平均評点を出しており、意見をはっきり表明しにくい自己が相対的に捉えられている。

留学生項目

[表5-7 留学生に対する質問項目]

30i C C Cで日本語の能力が上達した	3.11
31i C C Cは日本語の勉強に役立つ	3.42
32i 自分の話したいテーマが議論できた	3.89
33i 留学生間でも国を超えて交流すべきである	4.53

因子4で目標言語学習への動機づけが高まったことを見たが、一回の交流だけでは、「30i 日本語能力が上達した」とか「31i 日本語の勉強に役立つ」といった認識に関しては、当然のことながら、高い評点はでていない。03秋の初回の交流のときに、自分が本当に話したいテーマを提示することが出来なかったと述べた学生がいたため、「32i 自分の話したいテーマが議論できた」を項目に加えた。この平均評定が3.89であったことから、ある程度話したいテーマについて討議することができたようである。「33i 留学生間でも国を超えて交流すべきである」は、留学生の回答の中で、2番目に高い評点平均点となって表れた。留学生同士においても国を超えた交流は難しい現実が窺える。

VI まとめと課題

ここでは、まず初めに、04年度秋学期に筆者たちが行ったクラス間交流活動の試みが双方の学生たちにとってどのように評価されたのかを、Vの事後アンケートの分析結果から、因子別に本稿の目的に沿って解釈していく。そして次に、今後の課題について言及したい。

交流活動に参加した成果を直接問う項目である因子1の「1参加して楽しかった」や因子2の「3もっと時間をかけて話したかった」、「25また機会があったら参加したい」が、日本人学生、留学生とも高い評点であったことは、双方に交流活動が好意的に受け入れられたことを示している。とりわけ日本人学生の評価が一様に高かったことは、異文化交流活動が日本人学生にとってこそ重要な意味を持つことを示唆している。

学生の中には無関心な学生や消極的な学生、気のりしない学生がいたことを考慮すれば、このような事後結果が出たことは、交流の及ぼすプラスのインパクトが、それらの学生に対しても大きなものであったことを示している。積極的でない学生に支持されることの持つ意義は重要であろう。

交流活動が好意的に体験されたことを表す因子1と因子2の各項目の評点をみると、一般的に留学生より日本人学生のほうが交流活動に高い評価を与えている。とりわけ、因子2は1%水準で日本人学生の因子得点が有意に高かった。一般的に日本人学生の評点が高くでたのは、Vの〔表5-3〕で見たように、学生の多数を占める日本人学生に現実の交流経験が非常に少ないという点あげられる。だからこそ、実体験の持つ力の影響が大きかったのであろう。反対に、留学生の評点が低いのは、多元的要素が考えられ、ここで結論することはできないが、クラスの大半の日本人学生が経験したような新鮮な体験という要素は薄い。他に、コミュニケーション・ギャップの問題や議論の内容＝関心事の問題等々が複雑に重層して絡み合っていると思われる。

因子3は、「自分の国、国際的な事象を知ること」であるが、これらが日本人学生、留学生とも一様に高いのは、学生たちが知的刺激を求めていることの表れではないだろうか。学生たちが交流をすることによって、自分が知らないことに気づき、自国や国際的な事象を知ることへの関心が高まったことを示している。「18国際的なことについてもっと学ばなくてはならない」と「19自分の国についてもっと学ばなくてはならない」は、異文化の他者との交流に欠かすことのできない項目でもある。

因子4は、言語教育/学習と異文化交流とが密接に関連していることを表しており、この因子のみ留学生のほうが5%水準で因子得点が高く出ている。JSL環境にいる留学生にとってコミュニケーション言語の果たす役割りの重要性は言うまでもないことだが、日本語母語話者との生の相互作用による影響は見逃せない。日本人学生の評点は留学生と比べれば相対的に低い結果になっているが、交流活動でのコミュニケーション言語が日本語であったにもかかわらず、4.29と高い評価が出ている。このことは、日本人学生にとっても交流という実体験が目標言語学習への動機づけと密接に関係していることを示している。目標言語を使用してコミュニケーションする留学生との実体験が、日本人の英語の運用能力を省み、それが目標言語の動機づけへとつながっていったと考えられる。また、使用言語が日本語であり、日本人との交流であったにもかかわらず、留学生（中国人）に英語が重要なコミュニケーション言語として認識されていることは、日本人学生の英語への刺激となるのではないであろうか。

学生たちの事後評価を目的と関連させて述べてきたが、最後に、今後の課題についていくつか述べておきたい。筆者らによるこれまでのクラス間交流活動の蓄積から、語学授業と異文化コミュニケーションとの相互連関が見えてきた。両者の理論的展開が今後必要となるであろう。現実的な課題とし

ては以下があげられる。

- 1 言語運用能力とコミュニケーション能力の相乗作用について
- 2 観念レベルでの目標言語学習への動機づけから、いかにして行為レベルへともっていくか
- 3 異文化交流に無関心・消極的な学生たちをいかにとり込んでいくか
- 4 コミュニケーション言語としての英語の可能性について

おわりに

留学生のスピーチの聴衆を求めてスタートした留学生日本語クラスと日本人学生英語クラスとの交流活動も3回を経過した。参加者の感動や気づきや学びを目の当たりにする一方で、回を追うごとに新たな問題に遭遇するものの、筆者らは同じキャンパスで学ぶ留学生と日本人学生が会って交流することの意義を強く感じている。筆者ら自身も語学担当教師としてこの活動を通じて互いに多くを学ぶことができた。人と人が会って、お互いの存在を鏡像のような形で学ぶことができるとき、関わる人々すべての存在が大きな財産であることを思う。

文献)

- 有田佳代子2004「留学生と日本人学生の相互交渉創出の試み」『敬和学園大学紀要』129-147
- 實平雅夫・河合成雄・瀬口郁子2004「キャンパスにおける交流プログラムが日本人学生に与えるインパクトー神戸大学国際学生交流シンポジウムを事例としてー」『神戸大学留学生センター紀要』85-104
- 梶原綾乃2003「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117号 93-102
- 金城尚美1998 「異文化交流による心的態度の変容——韓国人留学生と日本人学生の合同クラスを通して(研究論文)」 沖縄外国文学会『Southern review』No.13 37-54
- 小島聡子「多文化共生社会における日本語教育」2004『清泉女子大学人文科学研究所紀要』
- 箕浦康子代表1998『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』（平成7年度～9年度科学研究費補助金研究成果報告書）
- 野沢智子・坪田典子2004 「クラスを超えた学び合い(2)ー日本人学生英語クラスと留学生日本語クラス間交流ー」 『文教大学国際学部紀要』第15巻第2号 135-150
- 鈴木康子・島崎美登里2002「JLPとELPによる国際交流授業：討論とグループ・プロジェクトの試み」『ICU日本語教育研究センター』11 69-78
- 高取康之2004「英語教育に於ける異文化コミュニケーションの効果」『国際経営フォーラム』77-88
- 田中共子1996「日本人チューター学生の異文化接触経験：ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己の成長を中心に」『広島大学留学生センター紀要』第6号
- 坪田典子・野沢智子 2004 「クラスを超えた学び合いー留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間交流ー」 『文教大学国際学部紀要』第15巻第1号 117-131
- 徳井厚子1997「異文化理解教育としての日本事情の可能性ー『ディベカッション（相互交流型討論）』の試み」『日本語教育』92号 200-211
- 八島智子『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版 2004
- 横田雅弘1991「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』8号 81-97

